

【実践報告】

武庫川女子大学における教育実習事前事後指導（中高）の実践報告

Practical Report on Preliminary and Follow-up Guidance for Practice Teaching  
(Junior and Senior High School) at Mukogawa Women's University

大山 正博\* 池田 容子\*\* 谷本 公子\*\*  
中山 大嘉俊\*\* 濱崎 伸樹\*\* 大和 一哉\*\*

OHYAMA, Masahiro\* IKEDA, Yoko\*\* TANIMOTO, Kimiko\*\*  
NAKAYAMA, Takatoshi\*\* HAMASAKI, Nobuki\*\* YAMATO, Kazuya\*\*

キーワード：教育実習事前事後指導 遠隔授業 対面授業

## 1. はじめに

武庫川女子大学では、再課程認定前の入学生（2018年度入学生まで）に対して、教育実習の事前事後指導に関する科目は「教育実習指導（中高）」（4年生，通年科目，15回，1単位）であった。再課程認定後の入学生（2019年度入学生から）については、「教育実習事前指導（中高）」（3年生，後期，8回，1単位）及び「教育実習事前事後指導（中高）」（4年生，通年，8回，1単位）と変更した<sup>①</sup>。さらに「教育実習指導（中高）」は2クラス開講であったが、「教育実習事前指導（中高）」と「教育実習事前事後指導（中高）」は3クラス開講と1クラス増やした。つまり，1クラスあたりの受講者数を少なくした。上記のような変更を行った理由は以下の通りである。

- ① 4年生の5月上旬から教育実習が始まるため，4年生から教育実習の事前指導を開始すると4月上旬に一部集中講義を取り入れなくてはならずタイトなスケジュールになるとともに，十分に教育実習の意義などを理解する前に実習に臨まないといけなかった。
- ② 3年生後期から教育実習の事前指導を始めることで，教育実習の理解を深めるとともに，教育実習へのモチベーションを維持することができると考えられた。
- ③ ②に加えて，開講クラス数を増やすことで1クラス単位の受講者数が少なくなり，よりきめ細かな指導ができると考えられた。

現在，再課程認定後の入学生である2019年度入学生（2022年9月時点で4年生）は，3年生後期の「教育実習事前指導（中高）」を終え，「教育実習事前事後指導（中高）」を履修している。

本論は，2019年度入学生に対する「教育実習事前指導（中高）」及び「教育実習事前事後指導（中高）」における各担当教員の講義内容を記録しておくことで，学内外を問わず，今後の実践の参照となることをめざす。なお，執筆者（担当教員）間でシラバス<sup>②</sup>は共有しているが，それぞれの講義内容の細部は異なる。本論では，各執筆者が工夫した点等及び講義に対する自身の所感を記す。執筆内容の大枠は執筆者間で共有しているが，細部の形式等は各自の裁量による。

また，執筆者のうち濱崎は，2022年度後期から「教育実習事前指導（中高）」を担当する予定であり，現時点では講義を行っていない。そのため濱崎の執筆箇所は，各執筆者の報告を受けて今後の実践の計画及び抱負を記すことにする<sup>③</sup>。

---

\* 学校教育センター助教 \*\* 学校教育センター特任教授

## 2. 実践報告その1－「教育実習事前指導（中高）」（3年生，後期，8回，1単位）－

### 2-1 グループワークによる授業づくりと課題解決（受講生：45人，担当教員：池田容子）

#### (1) 授業の概要

全8回の内容のうち，実習へ臨むための基本的な姿勢と基礎知識を前半の4回について遠隔（オンデマンド型）で行い，後半の4回は実際に生徒の前で授業をすることを前提に，対面授業を実施し，グループにて指導案の作成と模擬授業を行った。

表1 講義のスケジュール（池田）

回	内容	方法
1	ガイダンス・教育実習の意義・目的	遠隔（オンデマンド型）
2	生徒理解・学級経営の意義と実際（1）	遠隔（オンデマンド型）
3	生徒理解・学級経営の意義と実際（2）	遠隔（オンデマンド型）
4	教師の資質と役割	遠隔（オンデマンド型）
5	学習指導の進め方（1）学習指導案の作成方法	対面（グループワーク）
6	学習指導の進め方（2）説明・発問・板書等	対面（グループワーク）
7	学習指導の進め方（3）模擬授業の実際	対面（グループワーク）
8	学習指導の進め方（4）模擬授業の実際	対面（グループワーク）

#### (2) 授業の実際

2021年後期は，コロナ禍で蔓延防止措置が取られ，感染対策のためほとんどの授業が遠隔で行われた中，実際に大勢の人の前で話す経験，及びグループで何かを作り上げる経験をぜひともさせたいと思い，後半の4回はあえて対面授業，及びグループ演習を積極的に行った。

前半4回では毎回のオンデマンド配信の資料を見せて課題を提出させた。回答は次週までに参加者同士でGoogle Classroomを通じて共有できるように心がけた。テーマとしては，第1回は学校とはどういうところか，法律上の教員の立場など学校に関する基本を知り，これから自分が実習に行く学校の教育目標などを調べる課題などを課した。第2回は教育実習でどんなことが行われるのか，実習へ行く心構えや参加する姿勢について，第3回は学級経営をどのように行うのか，生徒指導的観点に基づくことについて，第4回は教員として知っておくべき体罰事案やハラスメント事案について，それぞれ20分程度の説明動画を配信し，内容に応じた課題を課した。

後半4回は感染対策を徹底し，対面で行った。4名編成11グループを学科や学年を考慮して作り，グループワークを行った。学習指導案の作成では，各自で考えたものを持ち寄り，グループ内でより良いものを作り上げるための相談の期間を多くとった。7回，8回は各グループの代表者による模擬授業を行った。また，第7回，8回では，授業の実際の実施の他，「こんなときどうする」というテーマで実際に実習中に起こりそうなトラブルや判断に困ることなどについて事例を挙げ，対応策をグループで話し合い，全体での意見交換会も行った。例えば，「誰かが間違えて発表したことに對し冷やかして笑った生徒にどのように対応するか」に對し具体的な声のかけ方や「実習とプライベートな面をどのように区別するのか」など様々なテーマで内容を検討し，グループや全体で共有した。

第7回，8回で行ったテーマの例としては前述の他に，例えば「大学で学んだことと指導教諭の言っていることが違ったら」「指導教諭が教えてくれることと違う方法をやりたかったら」「授業がうまくいかなくて落ち込んだら」「生徒が話を聞いてくれなかったら」「指導教諭から食事に誘われたら」「実習が終わっても引き続き来てほしいと言われたら」「生徒に連絡先を聞かれたら」など，その他様々な場面を想定して対応策を話し合った。

#### (3) 授業を実施した上での所感

対象の学生は2020年度もコロナ対応で対面授業ができておらず，実際に多人数の前で話すことに

戸惑うものも一定数いた。特に中高生が未知の存在であり、実習へ行くことに不安を感じている学生も多くいたため、第7回、8回で対応策を検討したことは有意義であったと思われる。一方、模擬授業は受講生が多かったため、代表者だけが授業をする形になったので、全員が人前で発表する機会ができればよかったと思う。特に教員では絶対に必要な、教室の後部まで届く声を出すという課題に対し、この講義では実践できなかつた学生もいたため、さらにじっくり取り組ませえる必要性を感じた。

## 2-2 オンデマンド型授業における工夫について（受講生：45人、担当教員：中山大嘉俊）

### (1) 授業の基本的な構成

本講義はコロナウィルスの影響により、すべてオンデマンド型の遠隔授業で実施した。受講生は教育学部でなく他学部の3回生である。授業を行うにあたり、次の3点について留意した。

- ① 表2に示した第1回から第8回までの各テーマについて、それぞれ授業の要点をまとめた動画を録画・編集して受講生と共有した。なお、受講生の受け身の時間が長くなり、集中力が途切れやすくなることも考え、学修内容をいくつかのまとまりに分け、ひとまとまりは15分程度とした。
- ② 各回の課題は、教育実習や教師になった際にも活用できるように、文部科学省等の実践資料・動画から受講生が専門や興味・関心に応じて選択できるようにしたり、演習中心の内容にしたりした。
- ③ 受講生からの提出課題は個々にフィードバックするとともに質問ができるようにした。また、提出課題の全部、もしくは抽出分を受講生に掲示し、感想や意見のやり取りができるようにした。

### (2) 授業の実際

表2 講義のスケジュール（中山）

回	内容	方法
1	教育実習の目的・意義、学校現場の状況と今日教育課題	遠隔（オンデマンド型）
2	生徒理解・学級経営の意義と実際	遠隔（オンデマンド型）
3	教師の資質と役割	遠隔（オンデマンド型）
4	学習指導の進め方（1）学習指導案の作成方法	遠隔（オンデマンド型）
5	学習指導の進め方（2）発問、板書、机間指導、ノート指導等	遠隔（オンデマンド型）
6	指導案の作成と授業の実際（1）模擬授業の実施①	遠隔（オンデマンド型）
7	指導案の作成と授業の実際（2）模擬授業の実施②	遠隔（オンデマンド型）
8	指導案の作成と授業の実際（3）模擬授業の実施③	遠隔（オンデマンド型）

第1回は、今後の社会の変化も視野に入れて生徒や保護者、教職員等に関する教育課題を幅広く扱い、データ等をもとに解説した。教育課題

を1つ選択させ、選択理由や考えを書かせたが、教員の働き方改革を選んだものが6割に上った。第2回は、生徒理解や学級経営のポイントを事例をもとに説明した後、実習生と生徒との間で起こりがちな問題場面を提示し、生徒との距離感、自身の立場や役割等について考えさせ、第3回につなげるようにした。

第3回は、多くの自治体が挙げている教師に求められる「①教育への情熱、②実践的指導力、③豊かな人間性」と、受講生自身の教師を目指す理由及び教師に向いている点を重ね合わせて考えさせた。

第4回以降は、アクティブ・ラーニングをふまえた学習指導の進め方、指導案の作成である。学習指導の進め方について、受講生は、中央教育審議会の答申や学習指導要領に関する学修を通して、アクティブ・ラーニングや協働といった概念の重要性を理解している。しかし、「これまで受けた中・高校等の授業」についてはほぼ全員が教師主導と回答しており、また、ICTを活用した授業を受けたという受講生も2割弱であった。こういったことから、受講生が指導案を作成する際に、めざす授業をイ

メージしやすいように、文部科学省公式動画や独立行政法人教職員支援機構、国立教育政策研究所などから受講生に自身の教科・領域に関する授業実践例や実践事例を調べさせたり、視聴させたりした。各自が作成した指導案をもとに開始から 10 分間の模擬授業を録画し文字に起こすことで授業のポイント等をふりかえらせるようにした。

### (3) 授業を実施した上での所感

課題に対して提出された文書の内容から、教科指導や生徒指導、学校教育活動に関する基礎的な理解が図れたことや教育実習生として学校の教育活動に参画する意識が高まったことが分かった。また、受講生が自身の専門や興味・関心に応じて動画等を選択できるようにしたことも効果があった。しかし、生徒指導に関するロールプレイ、また、模擬授業についての検討・発表等については、どうしてもグループ等での意見交換や作業が必要になるためオンラインでは難しかった。今後の課題としたい。

## 3. 実践報告その2 - 「教育実習事前事後指導（中高）」（4年生，通年，8回，1単位） -

### 3-1 「グループによる学習指導案改善・模擬授業」と「教育実習に対する個人の意味づけ」への支援方法（受講生：45人，担当教員：大山正博）

#### (1) 授業の概要

表3 講義のスケジュール（大山）

学習指導案の作成及び模擬授業の実施を第6回までの主題とした。第1回は遠隔授業（ライブ型）でガイダンス等を行い、第2回から第6回（第3回を除く）は対面での授業を行った。ただ学習指導案を作成するのみでなく、他の学生の面前で模擬授業を行う

回	内容	方法
1	ガイダンス等（教育実習の目的等の説明）	遠隔（ライブ型）
2	授業観察及び学習指導案作成のポイント	対面
3	個人による学習指導案作成	遠隔（オンデマンド型）
4	学習指導案改善と模擬授業の準備	対面
5	（グループワーク）	
6	各グループによる模擬授業	対面
7	個人による教育実習のふりかえり	遠隔（オンデマンド型）
8	教育実習に対する個人の意味づけ（個人内評価）について	対面

ことで、教育実習に対する不安を少しでも解消できると判断したためである。第7回遠隔授業（オンデマンド型）、第8回（対面授業）は教育実習に対するふりかえりを行う機会として設定した。

#### (2) 工夫した点等

工夫した点は二つある。1点目は、第4～5回に行ったグループワークと第6回の模擬授業についてである。具体的には教育実習の日程の都合上、授業に出席できる学生が入れ替わることを想定し、指導案の原案を作成した学生以外が中心に授業を行うよう指示したことである。それにより、グループの誰もが模擬授業を行うことができるようにし、仮に原案を作成した学生が第6回に出席できなくても模擬授業を行えるようにした。

2点目は、教育実習に対する個人の意味づけ（個人内評価）を行うために、「ライフヒストリーデザイン曼荼羅」④を活用したことである（図1参照）。ライフヒストリーデザイン曼荼羅とは、理想の未来（「第4章（結）未来へ」：図1左上の箇所）を描いてから、学習者自身の現在や過去の経験を意味づけることをねらいとした作文様式である。今回は、「第3章（転）」（図1左下の箇所）に教育実習中の自分の姿を、「実習前は想像」で「実習後は体験を基」に描くよう指示した。実習前と実習後に曼荼羅を作成することにより、学生は自らの変様を評価できる。他ならぬ自分の人生における教育実習の意味を理解することがねらいである。

### (3) 授業を実施した上での所感

以下、工夫した点についての所感を述べる。まず、3年次の「教育実習事前指導」等において学生が学習指導案の作成について学んできたこともあり、グループワークを円滑に進めることができた。さらには、グループワークや模擬授業を通して、様々な意見や考えに触れることができた点がよかったという学生の感想もあった。この感想は、学習指導案の原案を作成した学生以外も積極的に参加できる授業構造に起因するものと考えられる。

反面、一人ひとりが作成した学習指導案についての専門的指導がほしいという学生の声もあった。担当する教員の専門外である教科の指導は難しいこともあるため、グループを教科ごとに分けて専門性を高めるといった対処法も考えられる。ただし、違う教科の学生がグループにいることの効果（専門外の学生にもわ

かりやすい授業を考える等）もある。結果として、全体向けの教育実習事前事後指導では、今回のように教科ごとのグループ分けはせず、様々な意見に触れる機会を設ける方がよいと考える。学生が担当する教科に興味のない生徒へ

の対応の練習になるためである。

ライフストーリーデザイン曼荼羅に関して、現時点では実習前後における変容をみる授業（第8回）を行っていないため、効果を検証できていない。学生の実習前の記述をみるかぎり、教育実習中の自分の姿は想像でしかなく具体性に乏しい。おそらく、実際の体験を基に描く実習後の記述は具体的なものになっており、そこを実習前の記述と比較することで、学生自身における教育実習の意味が明らかになってくるであろう。このような一人ひとりの教育実習に対する意味づけを次年度以降の学生に共有することで、実習前の学生の教育実習に対するイメージに具体性を持たせることができる。

### 3-2 「よりよい授業づくりのための学習指導案作成」と「教育実習に対する悩みと対処」への支援方法（受講生：44人、担当教員：谷本公子）

#### (1) 授業の概要

学習指導案の作成および模擬授業の実施を第6回までの主題とし、大学の基本方針に則り、前期は遠隔授業とした。5月9日から実習が開始する学生のため、第6回学習指導案の作成までを4月中に終えることとした。第7回遠隔授業（ライブ型）は実習直前を想定し、10数名程度の4グループに分けて実施した。最終第8回（対面授業）は教育実習に対するふりかえりを行う機会として設定した。

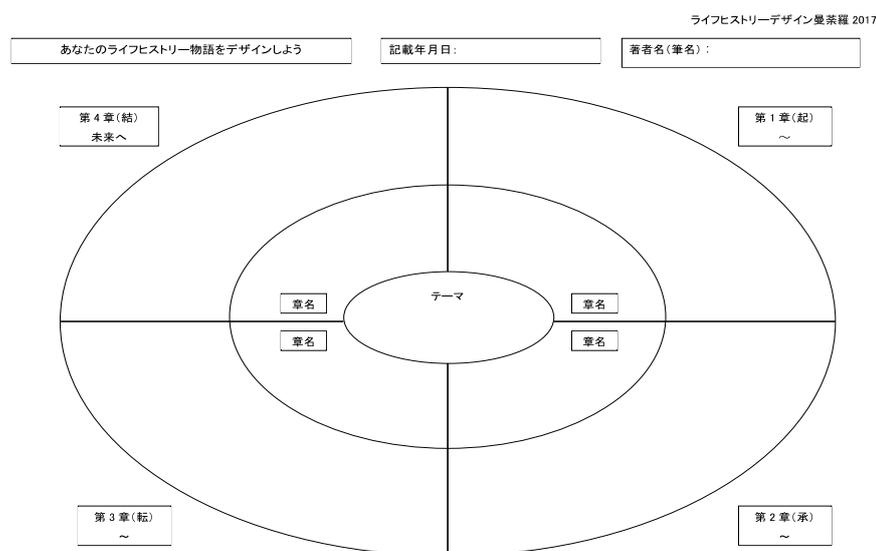


図1 ライフストーリーデザイン曼荼羅

## (2) 工夫した点等

1点目は、よりよい授業をつくるためのポイントとして「生徒目線から見る」と「授業展開の工夫」をあげ、主体的・対話的で深い学びを実現するため「①教師がしゃべりすぎない、②教師に向かって答えるのではなく、自分の考えに他の人

がかかわるように発言させる、③授業の途中に話し合いの時間を取り入れる」ことに留意するよう助言した。また、学習規律の重要性、発問・指名の方法や生徒の意見を加えた板書計画の工夫についても提示した。さらに、校種（中高）・教科（英語・家庭）・実習学年が様々なため、第6回の模擬授業発表は、学生が各自で第三者（友人や家族等）の前で行うこととし、自身のふりかえりと、見てもらった方からの指摘などを整理することとした。

2点目は、教育実習直前の悩みや不安

を解消・軽減するため、第7回のライブ型配信では、実習中に起こりそうなトラブルを予想し、それを共有して解決策を提案する機会とした。また、協議しやすいように希望をとり4グループに分けた。具体的には右表の内容を1人5分

程度で発表し、トラブルの対応案はリレー形式で回答することとした。

表4 講義のスケジュール（谷本）

回	内容	方法
1	教育実習の目的・意義、実習生としての心得	遠隔(オンデマンド型)
2	授業観察・記録の方法とその分析、日誌の書き方	遠隔(オンデマンド型)
3	年間計画・単元計画・学習指導案の作り方	遠隔(オンデマンド型)
4	よりよい授業のために きまり・発問・板書計画	遠隔(オンデマンド型)
5	略式学習指導案の作成及び評価方法の工夫	遠隔(オンデマンド型)
6	研究授業の準備・模擬授業発表とふりかえり	遠隔(オンデマンド型)
7	「予想されるトラブルあるある」とその対策	グループ別 遠隔(ライブ型)
8	教育実習に対する個人の意味づけ（個人内評価）	対面

表5 グループワークの内容

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| ① | 自己紹介(所属学部・組・氏名)、実習先校種/教科・実習期間 |
| ② | 何を大切に教育実習に臨もうとしているか           |
| ③ | 第5回指導案に基づいて行った模擬授業で見つけた改善点    |
| ④ | 教育実習中に起こりそうなトラブル1つを考えて発表する    |
| ⑤ | 前の発表者が示したトラブルの対応案を示す          |

## (3) 授業を実施した上での所感

第7回「予想されるトラブルあるある」では様々なものが発表された。一部を次に紹介する。

- |  |                              |
|--|------------------------------|
| ○生徒の予想外の反応(反応がなく授業が進まない等)があった          | ○予定より早く授業が終わった               |
| ○授業中、生徒が突然怪我(or 熱中症)をした                | ○授業中、寝ている生徒がいた               |
| ○授業中、ICT 機器が動かなくなった                    | ○ICT 機器ばかりを使うと、生徒のノートに何も残らない |
| ○生徒から「連絡をとりたいたので SNS の番号を教えてください」と言われた | ○給食指導にてこずる                   |
| ○生徒を厳しく指導できない                          | ○教育実習の事前打合せについて何も連絡がない 等     |

リレー形式にした対応案も学生同士で明確に示されていた。また学生から、その他の不安や疑問が提示されたが、他の学生から自らの体験等を参考に解決策が示され、活発に協議が実施できた。

第8回は、実際に起こったトラブル等を発表し、その解決法を協議した。最後に、実習生による次年度の実習生のための『教育実習サポートガイド』を作成した。

3-3 教師としての「勤」を磨くことを目指した取組み—主として学習指導案作りを通して—（受講生：39人，担当教員：大和一哉）

(1) 授業の構想について

表6 講義のスケジュール（大和）

受講生は、生活環境学部情報メディア学科（3名）、音楽学部演奏学科（14名）及び応用音楽学科（20名）、薬学部健康生命薬科学科（2名）に所属する4年生である。日常的に教育学に取り組んでいる教育学部の学生と異なり、教科指導に関する知識外の情報に触れる機会が少ないと想定し、特に生徒理解（生徒指導）に基づく学習指導や学級経営を意識した教育実習になるよう本授業を構想した。

回	内容	方法
1	教育実習の目的・意義 実習生としての心得と実習校との関わり	遠隔 (オンデマンド型)
2	授業観察・記録の方法とその分析 実習日誌の書き方	遠隔 (オンデマンド型)
3	指導案の作成と授業の実際（1） 模擬授業の実施①	遠隔 (オンデマンド型)
4	指導案の作成と授業の実際（2） 模擬授業の実施②	遠隔 (オンデマンド型)
5	指導案の作成と授業の実際（3） 模擬授業の実施③	遠隔 (オンデマンド型)
6	指導案の作成と授業の実際（4） 模擬授業の実施④	遠隔 (オンデマンド型)
7	教育実習のふりかえり	遠隔 (オンデマンド型)
8	まとめと評価	対面

(2) 授業の実際

授業は表6の通り、シラバスに基づき実施した。オンデマンド型による授業を中心にしたため、学生同士の直接的な交流を行う事はできなかったが、指導案を作成することを通して実習生としての学びのリアリティを高める工夫を行った。

第1・2回において、「実習校の特色をどう把握するのか」「あなたはどのような教育活動をしようとするのか」「どのように生徒を理解するのか」「実習の経験を今後どう生かすのか」「実習初日に職員室にてどのような挨拶をするのか」「どのような授業観をもって授業を行おうとするのか」などの問いに答えることを通して、事前に臨場感を高めるとともに、考えたことが実習で実際に役立つことを想定して取り組んだ。

第3～6回では、実際に実習で行う授業を想定して、学習指導案作成に取り組んだ。予め、学習指導案の形式や内容を例示した上で、第3回は「単元名」「単元計画」「単元目標」「評価規準」についての記述に取り組んだ。学生にとって単元目標を3観点から書くこと、評価規準において生徒のパフォーマンスを想定しておくことなどが難しかったようである。

第4回では「単元の趣旨」について、生徒観、教材観、指導観から書き分けること、第5回では「本時の目標」「本時の評価規準（判断基準B）」「本時の展開」の記述に取り組んだ。これらの取組みについては、その都度添削し、メールにて学生とやり取りを行った。そして、一通りの記述を終えた段階で、学生の理解を得た上で学習指導案をクラスルーム上で公開し、相互に読み合い、参考になるところを取り入れて学習指導案を完成させる場面を作った。

作成された学習指導案の中に「ミュージカルって何？知って深めて楽しもう」という単元があった。鑑賞の学習に対して苦手意識を持つ生徒が多いため、有名で親しみやすい「キャッツ」を取り上げ、生徒の興味関心を最大限に引き出しながら、音楽の要素や構造、背景となる文化を理解させることを意図していた。更に単元の最後には、衣装をつけてステージで演じてみる場面を設定する工夫も取り入れている。この学習指導案に対しては複数の学生が参考にしており、その視点として「生徒の反応の想定」「学習への参加意欲の高め方」「主体的な学びの実現」などにより検討を加えていた。

### (3) 実践を通して

この授業では、実際の学校というものを可能な限り想定することにより、教育実習の実際と結びつけること、個々の学生の発想（専門性）を生かした授業づくりを進めることに力点を置いて取り組んだ。教育学において Theory in Practice と言われるように、現場では一般化されたマニュアルが通用することは少ない。教師が備えている「勘」とも言える感覚を少しでも身に付け、現場に赴いてほしいと願っての取組みだったと考えている。

## 4. 実践への抱負—教育実習を意義あるものにするために—（濱崎伸樹）

### (1) 授業の概要

教育実習に主体的に臨むため、全8回の内容を設定している（表7参照）。前半は生徒理解を中心に学習を行い、後半は授業づくりを中心に学習を行う。教育実習で大切なものはコミュニケーションのため、全8回を対面で行う予定である。特に後半の模擬授業ではグループワークと他の学生の前での授業実践を組み合わせることにより、教育実習への不安を払拭するのみならず、実践的な指導力の向上も期待される。

### (2) 配慮すべき点等

表7 講義のスケジュール（濱崎）

教育実習は、普段の大学での講義や研究とは異なり、教育現場の実際に触れながら、教育実践を総合的に学ぶ場となる。教育学部以外の学

回	内容	方法
1	ガイダンス等（教育実習の目的等の説明、学校現場の状況と今日の教育的課題）	対面
2	生徒理解、学級経営の意義と実際①	対面
3	生徒理解、学級経営の意義と実際②	対面
4	学習指導の進め方①（学習指導案の作成方法等）	対面
5	学習指導の進め方②（発問、板書、ノート指導、ICT活用等）	対面
6	指導案の作成と授業の実際①（模擬授業の実施①）	対面
7	指導案の作成と授業の実際②（模擬授業の実施②）	対面
8	指導案の作成と授業の実際③（模擬授業の実施③）	対面

生も多く受講する可能性も高く、「こんな場合はどうすればいいの？」という課題に直面する場合も多いであろう。問題や不安を解決するには実習校に尋ねるのが一番ではあるが、学生の課題解決能力を育てるためにも自分たちで考える時間を大切にしたいと思う。各回にグループワークの時間を設け、自分たちで考える習慣を身につけさせたいと考える。具体的には「実習とプライベートをどのように区別するのか。」「子どもたちを叱る際はどのような点に注意したらいいか。」など、教育実習で直面するであろう様々なテーマについて学生同士で話し合い、対応力を高めていきたい。

また、教育実習において一番力を入れるべきは授業である。チームで指導案を練り上げ、よりよい授業を自分たちでつくり上げる時間をたっぷり確保したい。模擬授業においては他のグループの学生が生徒役となり、子どもたちの反応も想定した、より実践的な取り組みを目指していきたい。特にアクティブラーニングやICTの活用などは学生たちも体験していない授業形態になるため、丁寧な指導が必要になると予想される。授業づくりだけでなく、授業の見方についても学習し、学生同士が切磋琢磨し、教育実習がより実りあるものになるように配慮する。グループ学習を授業づくりに取り入れることにより、多面的に教育について考えられるようにしたい。

## 5. おわりに

濱崎が執筆した前節の内容は、各執筆者の実践報告を受けたものであり、本論のまとめとしても捉

ることができる。そこでは教育実習の事前指導について二つのことを記した。この2点について述べることで本論の締めとしたい。

1 点目は、「教育実践を総合的に学ぶ場」としての教育実習の側面である。教育実習では、担当する授業以外にも、様々なことが起こる。そのため、「こんな場合はどうすればいいの?」という問題場面について事前に考えておく必要がある。例えば、「2-1 池田実践」, 「2-2 中山実践」, 「3-2 谷本実践」において、そのことを意識した講義内容がある。さらに、予想されるトラブルに対して学生が協議した解決策についてまとめた『教育実習サポートガイド』のような資料を作成しておくことは、次年度以降の学生にとっても有益である。

2 点目は、「教育実習において一番力を入れるべきは授業」ということである。各執筆者が共有するシラバスも学習指導案の作成が主題となっている。それに則りつつ、各執筆者がそれぞれ工夫を施している。例えば、「3-1 大山実践」は対面、「3-3 大和实践」は遠隔（オンデマンド型）の授業における工夫を記している。対面と比べ、遠隔ではグループ学習が行い難いという懸念がある。しかし、メールにおける学習指導案の添削、Google Classroom 等のオンライン学習システムでの意見交流を丁寧に行うことで、遠隔授業の有効性を高めることができる。

肝心なことは、遠隔、対面に関わらず、効果的に学生同士の意見が交流する場を設定することである。ここでいう学生同士とは、『教育実習サポートガイド』のような資料を通して接する過去の先輩も含まれる。横だけでなく縦とのつながりも実感することで、教育実習に臨む学生の心情は閉鎖的にはならず、開放的なものになるであろう。

また、教員間の交流も大切である。今回の実践報告をまとめるにあたり、各執筆者において他の報告から学ぶところは多かった。今後も定期的にこのような実践報告を行うことで、各自の実践を見直す機会をつくっていききたい次第である。

## 注

- (1) 本論で報告する実践は、「教育実習事前指導（中高）」及び「教育実習事前事後指導（中高）」であり、それら課目は中高教職課程を履修する（教育学部を除く）学生を対象としている。なお、教育学部で取得できる中学校教諭一種（国語、英語）免許については、「教育実習事前指導（中）」, 「教育実習事前事後指導（中）」を設定している。
- (2) シラバスについては、下記アドレスを参照（<https://www.mukogawa-u.ac.jp/~kyoumuka/syllabus/2022/dai/shikaku.htm> : 2022年9月5日アクセス可能）。
- (3) 2022年度に学校教育センター所属の教員による執筆のため、2021年度末に退職された教員（「教育実習事前指導（中高）」（3年生、後期、8回、1単位）を担当した、濱崎の前任教員）は、今回の執筆に関わっていない。そのため本論では、「教育実習事前指導（中高）」（3年生、後期、8回、1単位）について2名の執筆者、「教育実習事前事後指導（中高）」（4年生、通年、8回、1単位）について3名の執筆者となっている。それらの実践報告を受けて、濱崎の今後の実践の計画及び抱負を記すという流れになる。
- (4) 教育におけるエスノグラフィーを専門とする成田喜一郎のHPより、ライフストーリーデザイン曼荼羅は入手可能である。詳細は、下記アドレスを参照（<https://tokinomahoroba.blogspot.com/2021/05/life-history-design-mandala.html?q=曼荼羅> : 2022年9月5日最終確認）。

図1 成田喜一郎 “Life History Design Mandala（ライフストーリーデザイン曼荼羅）を描くために”，ときのまほろばを求めて：現在・過去・未来，<https://tokinomahoroba.blogspot.com/2021/05/life-history-design-mandala.html?q=曼荼羅>，（2022年9月5日最終確認）より入手。